

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

ポッゲンドルフ ロレンツ

---

申請者氏名

本研究は、地域における身近な神社がその周辺環境を対象として、景観という観点から、その現状、変容の実態を明らかとしかつ保全のあり方について論じたものである。自然信仰を特徴とする日本の神社は、歴史的にみてその立地において自然環境に依拠しながら集落などの社会環境形成に重要な役割を果たしてきたことが知られ、その一帯に形成される景観は、地域固有の自然と文化を反映した性格を有するものとして持続的な地域環境の保全の観点から着目される。しかしながら近代以降の都市化の開発圧の中において、建築物としての神社は存続しながらも周辺を含めた景観には大きな変容がもたらされ、その保全が急務となっている。

そこで本研究は、東京近郊において明治期の旧社格で「郷社」に位置づけられていた地域コミュニティレベルの神社を対象に、その景観の現状と戦後の変容に関して実態を明らかとするとともに、その保全という観点から課題を整理し望ましい保全の方策について考察を行うことを目的とし、全体で5章からなる論が構成されている。

第1章においては、こうした研究の背景および目的を述べるとともに、研究の方法、既往研究の整理、概念規定等を行い、研究の全体構成を提示している。

第2章では、東京近郊（東京都、埼玉県、千葉県）に存在する28箇所の旧郷社を対象とし、その立地および緑地空間に関する実態調査を行っている。立地に関しては、社殿の存置形式を周辺地形および集落との関係から調査し、各事例において社殿の設置方向などから観察される信仰の方向性と丘陵や河川等の自然地形との関連等を明らかとしている。緑地空間については、一般に鎮守の森と称される各事例の社叢を主な対象とし、その規模（奥行き）、社殿の囲繞性、神木の存在・樹種及び位置、参道並木の覆蓋性、鳥居等の空間分節装置分布、路面の材料の連続性を指標とした調査が行われ、神社の緑地空間が形成する景観上の特質の現状が明らかとされた。調査は現地調査を基本として実施され、この際に各神社の宮司らに対してのインタビュー調査も行われ、宮司らの神社の緑地空間に対する認識についても明らかとしている。

第3章においては、上記の同一事例対象について、20世紀以降、戦後期を主体に現在に至る景観の変容に関する調査を行っている。景観の変容は周辺環境の変化および神社の緑地空間の変化を指標として、地形図、空中写真の分析に加えて宮司へのインタビューが活用されている。その結果、周辺環境の変化は基本的傾向でありながら、大きな変化の時期に事例間で差がみられること、緑地空間の変化については樹林地の減少、神木の消失、空間利用の変化、公園化など変化に一定の特徴があることなどを明らかとしている。特に神木については杉および松の衰退が著しい

ことが明らかとなり、量的側面のみならず質的、文化的損失の大きなこの変化が地下水位の変化と関連していることなどが考察されている。

第4章においては、第3章での景観変容の結果をもとに多変量解析を用いて4種類に類型化し、それぞれについて詳細な景観の変容過程および要因を明らかとし、保全上の課題について考察を行っている。4類型は①過去の景観が基本的に維持されているもの、②景観が維持されているが一部公園化しているもの、③戦前から変容がはじまり緑地が縮退しているもの④戦後の変容が主で緑地が縮退しているもの、として整理され、各類型から一事例ずつを抽出して詳細調査が行われている。近世末期から現在にいたる景観変容過程とその要因が、古地図、古絵図、古写真に加え宮司への詳細なインタビューから分析された。その結果、自然環境要因としては地形等の立地条件や地下水等の環境変化が、社会環境要因としては神社自体の境内開発の経緯や行政による保全施策の経緯などが相互に係わる、各事例固有の課題として明らかとされている。

第5章においては、第2章から第4章までの調査を踏まえ、身近な神社を格とした地域景観の保全のための総合的考察が行われている。まず現行の環境保全施策として、神社およびその周辺に關係する法的制度を網羅的に抽出し、28事例について自治体独自の制度も含めてその適用状況を概観し、景観変容の実態と対照させることで各制度の得失について論じている。これを踏まえて今後の保全に向けた提言として、保全地域の区域設定に関するモデルを提示してまとめとしている。

以上本研究は、東京近郊の旧郷社を対象に、神社およびその周辺に形成された自然環境および社会環境の特徴の表出としての景観に着目し、その現状および変容の過程や要因を実証的に明らかとし、かつまたその保全のあり方についての提言を含めて論じたものである。本研究は今後の地域環境の保全において、自然環境と社会環境を総合的にとらえる視点とその保全のあり方に関する重要な知見を提供すると考えられ、学術上、応用上、寄与するところが少なくない。よって審査員一同は、本論文が博士(農学)の学位論文として価値のあるものと認めた。